

## フロイト・セミナー中級篇

# 第4回 超自我と罪悪感

重元寛人

今回は、フロイトの後期の代表的な論文である『自我とエス』(1923)にそって、特に「超自我」と「罪悪感」の概念について学ぶ。

ご存じのように、フロイトの初期の理論では、「心には、無意識的な部分がある」ということが強調された。無意識とは、当人が意識しようとしてもできない心の部分であり、そこには抑圧された様々な願望や記憶がうずまいている。それは、知らず知らずのうちに意識的な精神生活にさまざまな影響をおよぼしてくる。夢の生成、しくじり行為（Freudian slip）、そして神経症の症状などは、意識的な精神生活（意識と前意識）と無意識との葛藤の結果、妥協産物として生じたものである。

これを図式にすると以下のようなになる。

### 意識＋前意識 対 無意識

もう少し詳しくいうと、一言に「無意識」いっても、実はいくつかのとらえ方がある。『精神分析における無意識の概念に関する二三の覚書』という論文では3つの無意識を説明している。

- (1) 記述的な意味での無意識
- (2) 力動的な意味での無意識
- (3) 体系としての無意識

まず、(1)の「記述的な意味での無意識」というのは、ある時点で意識されていないという意味だ。したがって、その気になればいつでも意識できる、前意識もここに含まれる。フロイトの強調したかったのは、どんなに意識しようとしても意識できない無意識だから、(1)の無意識はあんまり重要でない。

次に、「力動的な意味での無意識」は、理由があって意識からしめだされたもの、すなわち抑圧されたものという意味だ。抑圧されたものを意識しようとするすると抵抗がおこる。それは、その無意識的な観念の内容が意識的な精神生活にとっては許容しがたいものだからだ。

力動的な無意識を研究していくと、そこでの心的プロセスは、意識的な心の働き方とは

かなり異なっているということがわかる。無意識とは、いまや単に「意識されないもの」というあいまいな概念ではなく、心の中である特別の働き方（一次過程）をするひとつの体系であるとみなされる。（体系としての無意識）

このように、「意識されるかされないか」という観点から、「心的プロセスの働き方」の方に重点を移していくと、もはや上記のような「意識+前意識 対 無意識」というとらえ方より、

### 自我 対 抑圧されたもの

の方がすっきりしてよいのではないかと思えてくる。このように、「自我」という概念を中心にすえて、心の構造をとらえる、というのがフロイトの後期構造理論の目標のひとつといえる。

では、『自我とエス』より、「自我」の定義。

われわれはそれぞれの個人に、心的なプロセスの一貫性のある組織を思い描き、これを自我と呼んできた。この自我に意識が結びついているのであり、これが運動性の経路、すなわち外界に興奮を排出する経路を支配している。これは精神のすべての部分的なプロセスを制御し、夜は眠りに入るものの、絶えず夢を検閲している精神的な審級である。抑圧もこの自我から生まれるのであり、心の一定の営みは抑圧によって意識からだけでなく、そのほかの種類の評価や活動からも排除されるに違いない。」

（『自我とエス』ちくま学術文庫『自我論集』より）

注目すべきは、自我が、「精神的な審級（mental agency）」であるという点だ。つまり、心の中で確固たる位置を占め、常に存在していて、ある機能をはたすものということだ。

自我は、ドイツ語では“**Ich**”すなわち「私」である。自我というのは「私」のことであると考えてみてもよい。（こんなことをわざわざ言うのも、後でわかるように、心の一部でありながら「私」以外のなにものかであるかのように感じられる部分もあるからだ。）

自我は、外界を知覚し、意識的な思考をし、運動を制御する。ということは、行動する人間の一番重要なところ（インプットとアウトプット）の主導権を握っているわけだ。こういって、自我というのはずいぶんえらそうだが、実はそうでない。自我の主導権は形式的なものだ。なぜか。

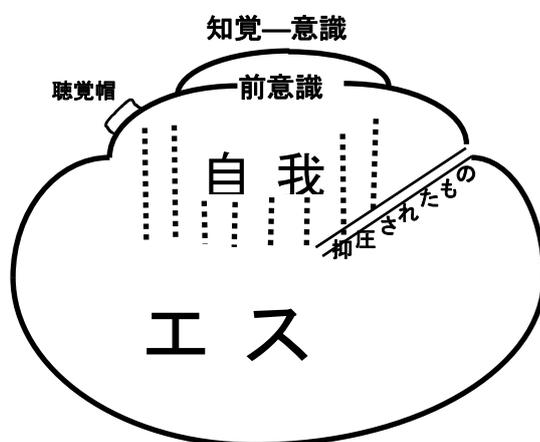
いろいろな理由があるが、第一にあげられるのがエスの存在である。

## エスの定義

知覚システムから発生し、当初は前意識的であるものを〈自我〉と名づけ、無意識的なものとしてふるまうものを〈エス〉と名づけることを提案する。

(中略)

われわれにとっては個人とは、一つの心的なエス、未知で無意識的なものである。自我はその表面にのっているのであり、自我からその核として知覚システムが形成される。これは図解すると次のようになる。自我はエスの全体を覆うものではなく、胚芽が卵の上ののっているように、知覚システムが自我の上ののっている範囲に限って、自我はエスを覆っているのである。自我とエスの間に明瞭な境界はなく、自我は下の方でエスと合流している。



『自我とエス』

エスという名称は、フロイト自身が発明したものではなく、G・グロデックが『エスの書』で用いた概念である（さらに、グロデックはニーチェの例に従ったらしい）。グロデックによれば、自我は、生においては基本的に受動的にふるまうものであり、未知の統御できない力（エス）によって「生かされている」ものであるという。

フロイトによる上の図と説明からも、個人の心において、大部分をしめるのは無意識的なエスなのだということが分かる。自我の主導権が形式的だ、といったのはそのためだ。

自我とエスの関係については、フロイトは例を用いて次のように述べている。

自我が機能的に重要なものであることは、通常は運動性への通路を支配するのが自我であるとされていることから明らかである。自我はエスに対して、自分を上回る大きな力をもつ奔馬を御す騎手のようにふるまう。(中略) 自我は騎手の場合と同じように、馬から振り落とされたくなければ、馬が進みたい場所に行くしかない場合が多いのである。すなわち自我は、あたかもそれが自分の意志であるかのように、エスの意志を行動に移すしか

ないのである。(『自我とエス』)

また、別の所では、自我を、立憲君主制における君主に例えている。つまり、形式的な権力しか持っていないということだ。

エスを支配しているのは、快感原則であり、その内部にうずまく様々な欲動興奮を、すぐに満足させるようとして、自我に圧力をかけてくる。しかし、自我は、現実をみており、現実原則にも配慮して行動しているから、エスの要求のすべてに従うわけにはいかない。つらいところだ。

現実とエスとの板挟み状態のなかで、自我はあの手この手を使ってエスをなだめようとする。エスの要求をそのままでは実現できない場合には、防衛、反動形成、昇華などを行い欲動を変形する。このような自我の働きは、大部分無意識的である。「(前) 意識 対 無意識」の図式がそのまま「自我 対 エス」の図式に対応しないのは、ひとつはこの点である。すなわち、

**自我には意識的な部分と無意識的な部分がある。**

**一方、エスはすべて無意識的である。**

さて、発達論的にみると、エスがもっとも古くからあり、そこから自我が分化してくる。自我の誕生にはいくつかの要因がある。

- (1) 知覚システムの影響
- (2) 身体表面の知覚 (身体的な自我)
- (3) 対象への同一視

このうち、(1)と(2)ももちろん重要であるが、個々人の性格を規定する上でもっとも重要なのは、(3)の**同一視**である。

同一視といえば、メランコリーでは、「対象喪失の後、対象に備給されていたリビドーが、自我の中で同一視に使われる」のであった。

以前の論文では、メランコリー (鬱病) の苦痛に満ちた情熱は、失われた対象を自我の中に再現し、これによって対象備給を同一視によって置換する行為であるという仮定によって、メランコリーを説明することに成功した。しかしその当時はこのプロセスの本来の意味を理解していなかったし、これがどれほど頻繁に、しかも典型的に起こるかは知られていなかった。その後このような代償行為が、自我の形成において大きな役割を果たすこと、<性格>と呼ばれるものを確立する上で大きく貢献することが明らかになった。(『自

我とエス』)

対象との同一視によって、自我が変化を受けるのはメランコリーにおいてだけではない。それどころか、**どんな自我も大部分同一視によって形成される**のだ。

ただし、同一視は、最初から対象喪失の結果おこるわけではない。最初は、対象備給そのものと同一視とが区別されないという。

個人の発展の最初期の原始的な口唇段階においては、対象備給と同一視は互いに区別されていなかったに違いない。後の段階で、性愛的な傾向を欲求として感じるエスから、対象備給が生まれるようになったと想定される。最初はまだ弱々しかった自我は、対象備給についての知識を獲得し、これに服従するか、抑圧プロセスによってこれから防衛しようとする。

このような性的な対象を放棄しなければならない場合は、その代償として自我が変化することが珍しくない。これはメランコリーの場合と同じように、自我の中に対象を作り出す行為として説明できる。この代償プロセスの詳細は、まだ不明である。口唇段階のメカニズムへの退行の一種であるこの〈取り込み〉によって、自我は対象を容易に放棄できるようになるか、放棄が可能になるのであろう。この同一視は、エスがその対象を放棄するための条件かもしれないのである。いずれにせよこのプロセスは、初期の発達段階において非常に頻繁に起こるものである。そして、自我の性格は、放棄された対象備給が沈殿したものであり、対象選択の歴史を含むものと考えられる。

(中略)

別の観点から見ると、このように性愛的な対象選択を自我の変化に転換することは、自我がエスを支配し、エスとの関係を深める一つの方法であると考えられることができる。ただし、自我はエスの経験にかなりの程度まで黙従するという犠牲を払うことになる。自我は対象の特徴を装うことによって、エスに対して愛の対象としての関係を結ぶことを迫るのである。自我は「さあ、対象の代わりにわたしを愛してごらん。対象にととても似ているよ」と呼び掛け、対象の喪失を代償することをエスにもとめるのである。

(『自我とエス』)

ここの説明は、すごく納得できると思いませんか。子供にとっての最初の対象は、親であり、小さな子供はしきりに親の真似をする。それは、親がいなかつらさに耐えるためであると。

さて、ようやくここで**超自我（自我理想）**の説明に入ることができる。超自我の発生にもまた、同一視が大きく関与する。

自我理想の背後には、個人の最初の（そしてもっとも重要な）同一視が潜んでいるのである。これは個人の＜原始時代＞である幼児期における父との同一視である。この同一視は当初は、対象備給の結果や帰結とはみえず、媒介なしの直接的な同一視であり、どのような対象備給よりも早い時期に行われるものである。（『自我とエス』）

まず、直接的な同一視がおこるのだが、なぜそれが父への同一視なのか。母への同一視ではないのか。実は、ここには以下のようなフロイトによる注釈がついている。

父との同一視というよりも、両親との同一視といった方が正確であろう。ペニスがあるかどうかによって性を区別する知識が得られるまでは、父と母は区別されていないからである。（『自我とエス』）

ともかく、このような最初の同一視が、超自我の核になる。

そして、次の段階で、……お待たせしました、**エディプス・コンプレックス**の登場です。エディプス状況において、少年は母に対して性的な欲望を抱く。これによって父との同一視は敵対的な調子を帯びるようになる。少年のエディプス願望は、父による去勢威嚇により挫折する。少年は、母という対象を放棄するにあたって、父への同一視がおこる……ん？何か変なのでは。対象を放棄した結果の同一視であれば、母への同一視なのでは？

以下の事情によって、ここは父への同一視が正常とみなされるらしい。しかし母との同一視がおこる場合もある。

父への同一視の方がおこりやすいのは、それによって少年の男性的な性格が強まるため、より現実に適応的であること。また、母親との情愛のこもった関係にある程度維持できるという利点もある。

### エディプス・コンプレックスの運命

母への対象備給と父への敵意

↓

父からの去勢威嚇

↓

母への対象備給の放棄

↓

父への同一視（の強化）

以上が、少年の陽性のエディプス・コンプレックス。同時に陰性のエディプス・コンプレックスというのもある。なぜなら、小さい子供というのは男の子であれ、女の子であれ、

両性的な資質をもっているから。

陰性のエディプス・コンプレックスでは、少年が、女性的な態度をとり、父への対象備給と母への敵意をもつ。これが崩壊すると、母親への同一視が起こる。

**陽性のエディプス・コンプレックスの崩壊 → 父親への同一視**

**陰性のエディプス・コンプレックスの崩壊 → 母親への同一視**

なお、少女のエディプス・コンプレックスについては、いろいろ難しい問題があり、フロイトも苦勞したようだが、詳しくは前回の『フロイト理論の基礎知識』を参照してください。

とにかく、この二つの同一視から、超自我が生まれる。

エディプス・コンプレックスに支配されている性的な発達段階においては、もっとも一般的な帰結として自我の中に＜沈殿＞が起こると想定できる。この＜沈殿＞はなんらかの形で、二つの同一視が結びついて生み出されるものである。この自我の変化は特別な地位を保持するものであり、自我理想または超自我となる。これは自我の他の要素と対立するものである。（『自我とエス』）

「自我理想」という概念は、『ナルシズム入門』（1914）のあたりからすでに登場している。それは、文字通り自我にとっての理想となり良心となるものであった。論文『自我とエス』では、その自我理想に「超自我」という新しいネーミングが与えられたわけだが、だてに呼び方をかえたわけじゃない。内容的にも新しい意味が加わっている。超自我についての新しい強調点は、たぶん以下のことである。

**超自我はとても強力なものである**

**超自我は大部分無意識的なものである**

まあ、この二つは同じようなことを言っているともいえる。超自我は、単に意識されている良心というだけではなく、むしろ無意識的なところで自我を強力に支配している。この強力さは、第一に超自我が自我がまだ弱々しかった時期に起こる最初の同一視であったこと、第二に超自我がエディプス願望という強力な願望を抑圧するために生じたという事情による。

自我理想はそもそも、エディプス・コンプレックスの抑圧というこの急激な転換によって成立するのである。エディプス・コンプレックスを抑圧するのが容易ではなかったのは

明らかである。両親、特に父は、エディプス的な願望の実現に対する障碍として認識されるので、幼い自我は、自らの中に同じ障碍物を作り出すことによって、この抑圧作用を強化したのである。幼い自我はそのための力がある程度まで父から借りるのであるが、父から力を借りるといふこの行為は、その自我に非常に重要な結末をもたらすことになる。超自我は父の性格を得ることになり、エディプス・コンプレックスが強いほど、そして（権威、宗教的な教え、教育、読書などを通じて）抑圧が急速に行われるほど、のちになって超自我は良心として、あるいは無意識的な罪悪感として、強力に自我を支配することになる。（『自我とエス』）

**罪悪感**は、超自我から生じる。普通の（意識的な）罪悪感は、自我が良心と異なる行動をしたということから生じる。しかし、罪悪感はむしろ意識されないことが多い。無意識的な罪悪感の示される例として、フロイトは以下のものをあげている。

- (1) **陰性の治療反応**：よくなるはずの精神分析治療によってますます悪くなってしまう患者の心には無意識的な罪悪感がある。
- (2) 無意識的な罪悪感から犯罪を行う者：もともと存在していた無意識的な罪悪感によって、犯罪行為をしてしまう人がいる（原因と結果が逆転している）。

このうち(2)については、すでにフロイトが『精神分析的研究からみた二、三の性格類型(1916)』の第三章で述べているものである。また、クラインも例えば『犯罪行為について(1934)』などの論文で、子供の犯罪傾向について同様の機制について論じている。

このように、超自我は強力に超自我を支配するが、ではそのエネルギーはいったいどこから来るのであろうか。

それは、「**死の欲動**」からくる。今回は、この問題について考えてみる。

補足.

ここで、第2回でふれながら深入りしなかった、ナルシシズムについての後期理論での修正に関して、補足説明しておく。以下は『自我とエス』からの引用。

これに基づいて、ナルシシズム理論に重要な補足を行うことができよう。原初においては、すべてのリビドーはエスの中に蓄積されていて、自我は形成途上であるか、まだ弱々しかつたと考えられる。エスがこのリビドーの一部を、エロスの対象備給のために送り出すと、いまや強くなった自我はこの対象リビドーを支配しようとし、自己を愛の対象と

してエスに押しつけようとする。このように自我のナルシズムは二次的なもので、対処から奪ったものである。

つまり、

一次ナルシズム：リビドーがエスに蓄積された状態（自我はまだ未熟）

二次ナルシズム：エスが対象に向けたリビドーを、自我に向け変えたもの

と、ということのようだ。これを第 2 回で説明した愛の発達過程にあてはめるとどうなるか。みなさんで考えてみてください。いずれにせよ、「ナルシズム」、「対象への愛」、「自我」のどれが最初でどれがあとからできるか、なかなかむずかしい。